

人間人格の形成関わっている（影響を与える）武道

動機

ほとんどの人は（武道をやっている人もそうだが）武道は道場で限定して行うものであると考えている。自分を守る方法だけであるという狭義な考えがある。あるいは武道を専門的に実用することを目的にする（bodyguards、軍人など）人もいる。ただし、私にとって、武道は日本、日本語、日本語教育に対する興味のきっかけになった。

過去：武道を始めた理由は今続いている理由と全く違う。13歳の時、自分の身を守るために始めたが、時間が経つに従って武道は日本の文化、歴史、言語に関する興味のきっかけになった。ロシアでは空手道をしていた草月流生け花の日本人師範のおかげで生け花と日本語の勉強を始めて、結局、専門を変えてロシアの東洋大学の日本学学部に入学した。

現在：ただし、私の専門は日本学ではなく、日本語教育である。この専門を選んだ理由も武道と密接な関係がある。子どものころから「なぜ私は自分で自分の身体を守らなきゃいけないか？なぜ行きたいところへ行きたい時間に行けないか？なぜ人間はそんなに残酷で、怖いのか」と考えていた。このような考えには様々な理由があった。具体的に言えば、非常に活発な子どもであり、教師に「うるさい」と言われたこともよくあるし、皆と同じであるソ連という国に育成されたのに、少し訛り（ウクライナ語）があったので、笑わされたこともあるし、動物が大好きだったけど、人間に殺された生き物をたくさん見たこともあるし、チカンに直接に会ったこともある。結局、私は子ども、女性、人間は怖い思いをすることなく暮らしてほしいと思い、私のほうから何ができるのかと考えるようになった。答えは一つしかない。他人を怖がらせない、逆に、他人の中に精神的な力を引き起こすような人間の人格の形成である。人格を育成することを始めるのは早ければ早いほど良いので、教える対象として小学生を選んだ。つまり、自分の興味である日本語、日本文化で人間の人格を育成したいと思って、教育大学の修士課程に入って、教師の仕事を始めた。

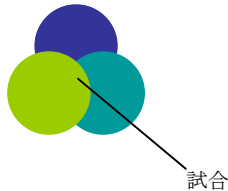
将来：私の教育観は様々な分野で受けた経験から生まれた。さらに、教育の専門に関する学習を始めて、武道の教育と日本語の教育の共通点を非常に沢山見つけた。だから、教育そのものは非常に幅広いシステムであると分かった。違うのは科目と目標を達成する手段、方法にすぎない。学習者の主体性、個人的なアプローチ、授業・稽古の構成などのような原理はどこでも同じである。私はすでに長い間教育というプロセスに参加して、教師は教えるために理論を丸暗記するより、実際に様々な教授法を学習者として体験しなければならないと考えるようになった。ロシアでは子どもに日本語も武道も教えていたが、やはり、私はまだまだ日本語・文化教育に対する学習の経験が足りないということが分かって、日本に来た。将来は日本語教育と武道教育を合わせた方法で人間を育成したい。

しかし、最初に「武道」というものは何かという質問に答えなくてはならない。

1) ほとんどの人は「武道」ということばを聞いて、試合（オリンピック・ゲームなど）によって世界で有名になった「柔道」、「空手道」、「剣道」のような名前が頭に浮かんでくる。ただし、私は、それらは武道そのものとは違うと思う。上記の「武道」は「武道」ではなく、「スポーツ」である。意味は全く違う。「スポーツ」というのは、誰がある分野で「一番」であるかを評価するためのものである。つまり、スポーツ、特にプロのスポーツ、そのものは人間の認識の発達を目指す意味深い目的を持っていないと思う。現在、プロの「スポーツ」の部分である「柔道」・「空手道」などは人間の野心を充足させるが、金額を

稼ぐためにも存在していることがよくある。この目的を達成するため、方法として試合が使用されている。

しかし、試合そのものは、必ず否定的な意味を持っているわけではない。なぜならば、初心者のためにとっても大事な段階であるからである。試合の参加によって、人は自分の身体、精神、神経をコントロールするように教わる。ただし、ある段階まで試合に参加することは、+の意味があるが、この段階を超えて試合を続けると、-の意味になるに違いない。分かりやすさのために絵を作った。



1. 各○はそれぞれ「スポーツ」・「武術」・「武道」という意味を持っているが、各分野は重なっている。幸いに、ほとんどの人は 100%のスポーツマン、武道家、武術家の考えを持っているわけではない。100%の考えを持っている人がいれば、彼らはある枠組みの中に存在して、相手の立場に立って、相手の気持ちが分かる能力を持っていない。このような考えは専門デフォルメされたといっても過言ではないと思う。

2. 試合は各分野には、ある段階までに使われている。

試合の部分は枠組みがある。この枠組みを超える時期は個人により異なるが、越える際、各人は自分で「スポーツ・マン」か「武術家」か「武道家」かになるということを決定する。つまり、自分の道を選ぶと言っても良いと思う。

人間の性格、生活のスタイルは活動している分野と密接な関係があるので、スポーツマンは専門分野のみではなく、日常生活中にも他人に自分の優秀さを証明し、自分のこと、野心のほうを大事にするようになる恐れがある。

私はスポーツはいらないと思っていない。ただ、人は活動をやっている理由も、この活動から受けた影響も意識的に理解するはずと思う。例えば、私にとってスポーツは自分の身の感覚を訓練するためと、自分の武道を改善するための手段である（呼吸を改善するための水泳、身体の中心に対する感覚を改善するためのテニス、自分の重心の感覚を改善するための馬術など）。

2) 武道に関して記述する前に、もう一つの現象について言及したい。「武道」と「スポーツ」の祖先である「武術」である。実は、「武」という漢字の元々の意味は「戈を止める」という意味である。つまり、戦争を開始させないように、人間が厳しい練習を通して身に付けた能力を使うべきという意味である。「武術」の深い意味は「戦争を止める術（方略、方法など）」である。ただし、時間を経るに従ってなんでも変化するが、「武術」そのものに対して人間は異なる意味を入れた。「武術」は戦いの技術として最も重要な意味を持つようになった。つまり、実際に使うために修行されるようになった。伝統的な日本では殺すことを目指す武術しかなかった。1600年、つまり、徳川家康が日本を統一して支配した時まで、武術が日本の日常生活には（争いを目指し）非常に大事な役割を果たしていた。1600年以降、時間を経るに従って、「武術」そのものはいらなくなったので、「武道」に変換された。つまり、実際に使うよりは精神・認識の発達のほうが大事になった。ただし、現在も「武術」が存在していると言ってもよいと思うが、勿論、変化した。「実際に使うため」という概念に基づいて、「武術」は軍隊、自衛隊などで使用されている。

3) 武道には「スポーツ」のように、「一番」がない。各人は唯一の者である。お金を稼ぐ目的もない。私は武道とは人間の人格の形成を目指すことではないかと思う。身体（姿勢、動作など）の自然な美しさ、精神の力（我慢・寛大能力）、神経（情緒）の安定・コントロール、知恵（左脳も右脳も）の訓練ということを目指している武道は私にとって本当の武道である。武道の目的は平和を守ることである。平和を守るというのは、技を実際に使って問題を解決するわけではない。私にとって、技を使った武道家はもう負けたという意味がある。負けた相手は戦った相手にではなく、自分に負けた。技を使わずに問題を解決するほうがレベルが高いと私は思う。

「武道」に関する考えは自分の経験から生まれたが、現在私にとって「武道」に関する興味には二つの基礎がある。

私は武道に対して個人的かつ、日本語教師として、専門的な興味を持っている。**専門的に**武道は、完璧な教育システムであると思う。なぜならば、「武道」そのものは以上に述べたように、人間の人格（認識、生活観など）を育成しているからである。例えば、生活に問題があったとしても（失敗から悪、死まで）、精神的に負けないために武道が支えている。武道の意味が分かっている人は自分のことに対して厳しいが、他人に対して優しい、あるいは寛大な者である。他人を絶対に困らせたくない人である。このような気持ちは道場で生まれるまでにたくさん時間がかかるが、これは言語能力の発達と同じである。完璧にコミュニケーションを行うために何年間か「練習」をしなくてははいけない。母語、外国語も同じである。武道は言語と同じように生活中で研磨されるべきであると思う。

さらに、武道の語彙も認識の発達にも、日本語の学習にも非常に大きな影響を及ぼす。私は日本語を勉強し始めた時、武道はとても役に立った。なぜならば、ある言葉の意味を身体ですでに覚えていたとも言えるからである。（「赤」「横」「礼」など）。実は、世界で武道の修行には日本語の語彙が使われている。外国で武道をやっている人はこのことで困っているわけではないが、ただ技の名前の意味が分からない。しかし、技の名前の意味が分からない場合、技の本質の意味も分からないのではないか。技の本質の意味が分からない場合、武道の意味も分からないと思う。例えば、柔道には「谷落とし」という技がある。なぜ「谷落とし」なのかと考えると、この技の名前を作った人は意味というよりは気持ちを伝えたかったのではないかということが分かる。あるいは、空手には「あげ受け」という技がある。「あがる」ではなく「あげる」、さらに「受けながらあげる」という意味である。つまり、この技を使って相手に傷をつけるのではなく、逆に、傷をつけないままで柔軟にやる。日本語が分からない人はニュアンスも分からなく、先生の動作を真似するだけである。ほとんどの外国人は技の名前を音として覚えるが、幸いに、意味を大事にする人もいるので、私は大学で勉強していた時、このような人のために日露「武道辞典」を作成した。日本人の場合には別な問題がある。母語の語彙だから、意味を分析しないので、技の意味も分からない人が多い。

武道の技の名前の意味の理解は認識の発達のキーであると思う。簡単な例を挙げたら、「蟹」「蜘蛛」などの運歩法の名前がある。この運歩法をしながら、具体的に生き物の運動を想定できる。慣れた場合、運歩法を自動的に行うようになるが、具体的な言葉は知識というよりは身体の中身になる。つまり、武道の語彙によってすでに随分前に死んだ武道家の考えを「聞き」、この人の気持ちが分かることにより教わる。それと同時に、武道の語彙によ

って人の認識の一部である創造能力が発達する。それとともに技を実際に使う必要がないという気持ちも生まれる。

個人的に武道とは：

- 1) 精神的にリラックスできる、ストレスを発散できる。
- 2) 人とコミュニケーションを作ることができる。
- 3) かつて生きていた人間の考えに親しむことができる。
- 4) 道場で最も価値のあるものは人間の身分、財政状態、外見、能力などではなく、努力、性格、正直さである。だから人と人の中に本気の尊敬、互いへの寛大、信頼が生まれる。この私の教育観が道場に生じて、道場の外にも使用したい。
- 5) 自分と他の生き物を守る能力が生まれる。
- 6) 非言語活動によって直感、感覚を発展させながらもっと自分らしくなっている。
- 7) 日本語を習得することができる。

結局、私にとって武道とは、生活の大事な部分であるといっても過言ではないと思う。

では、武道そのものに関して、武道をやっている人はどう考えているかということが分かるため、スタイルが異なる二つの対話を行った。

対話 1

状態：現在武道をやっている道場で、先生に状態を説明して、様々な武道から経験を受けた拳士を対話の相手として推薦していただくようお願いした。先生は武道家らしく問題を解決できたと思う。稽古中に 4 人の黒帯の拳士で（プラス先生、プラス私）「ナターシャのチーム」を作った。このチームは技の訓練の代わりに理論訓練を行ったといっても過言ではないと思う。

過程：皆さんに論文を読んでもらって、内容に関するご意見（特に違う意見、批判のほうがよい）を教えていただくようお願いした。

残念ながら、批判、反対な意見があまり出てこなかったのも、出てきたポイント（日本語の間違いの以外）とその結果、私は考えたことを以下に記述する：

1) 「ナターシャの意見はナターシャの経験から生まれて、他人の意見・経験と違う」。私はこれは当たり前だと思ったが、なぜこういうふうに言われたか考えるようになった。私は日本語の話し方（回避表現など）を考慮しながら、考えている通り話してみるが、日本語で「他人の意見を考慮しないわけではない」というニュアンスを文章できていないということが分かった。ロシアでは発話者が暗黙のルールのように相手の意見を大事にして、お互いに自分の意見で交換する。喧嘩のように見えるかもしれないが、実際にそのようなことがない。（ロシア語の諺によると、口論中に真理が生まれる）。しかし、日本ではたぶん、暗黙のルールよりは「あなたの意見を大事にする」という意味を伝えている言葉（回避表現とか）で伝達するべきということが分かった。それで、日本語を教える際、このニュアンスも必ず説明しなくてははいけない。

2) なぜか異なる意見が出てこなかったかと考えて、武道に関係がない日本人の友達と相談してみたが、友達は「自分が深層で違う意見を持っていた場合、強く異なる意見を主張する人に会うと自己否定されたような感覚を持つ日本人もいる。主張しないけれど反対の意見を持つ人たち。このような人の反応に対する現時点で対処方法は分からない」と述べた。確

かに、日本人はまず、最初に相手の意見を肯定するので、「それも正しいかもしれない。でも、私は・・・と思う」のような表現を使う。つまり、日本人の対話のスタイルはロシア人の対話のスタイルと全く違うと思う。ほとんどのロシア人は最初は自分の意見を出す。なぜならば、「私は考えていることを正直的に説明した。これからあなたのほうからも正直的な考えを待っている」という意味があるからである。その他に、相手の説明によって自分の意見が変わる場合、このことはすぐ明確になる。つまり、お互いの影響、意見の変化、真理の発見のプロセスは明示的なことになる。私も最初から非常に固定的に書いてある自分のレポートを見せて、異なる意見をお願いしたが、結局の意見は取得できなかった。

3) 「「スポーツ」にも本気の武道に対して興味を持っている人、「武道」にもスポーツに対して興味を持っている人がいる。だから、道場には楽しくて、面白い雰囲気活着ている」。これは確かにそうだと思う。先生からのこの貴重なご意見をいただいて、非常に感動した。しかし、このような先生がこの道場にいなければ、雰囲気が違ったに違いない。なぜならば、ほとんどの先生は自分の原理・タイプに適切な生徒のほうを大事にするからである。生徒にとって、自分自身の考えを自由に持ってもらえるところはそんなに多くないと思いうからこそ、現在の道場を選んだ。

4) 「中国人の武道家は「武道」を「武道」と「武術」に分けられないかもしれない」。この意見は非常に興味深いと思う。なぜならば、私にとって、戦うための「武術」と戦いを否定する道徳的な「武道」は絶対に一致しないからである。今考えていると、やはり、歴史的に区別できないかもしれないが、拳士の中にある原理・考えでは区別できると思う。

ただし、「戈を止める」という表現は中国の武道に生まれた。以上に記述したコメントは中国の **Stratagems** という本を思い出すためのきっかけになった。この **Stratagems** によると、最初は平和的に問題を解決してみる必要があるが、最後の手段として戦争を始める。これから色々考えていきたいと思う。

対話 2

稽古以外の時間に道場の先輩（44 歳）に会って、最初は普通に対話を行った。最後にレポートを見せて、ご意見を伺った。

先輩は子どもの時柔道をやったが大人になって少林寺拳法の稽古を始めた。試合には今も参加している。

A とは相手（先輩）、W とは私である。

W: なぜ少林寺を始めようと決めましたか。

A: 日本には「親父狩り」が流行するようになったから。さらに、自分と他人を暴力から守りたかったからです。多くの方が良くないことをしている人を見ながら見て見ぬふりをすることがよくあるじゃないですか。私はこのような場合に黙らない。だから、暴力をふるわれそうになった時にきちんと対応したいと思いました。

W: 実際に技を使ったことがありますか。

A: ないですね。普通は喧嘩が始まるまで問題を解決できました。でも、こういうふうのほうがいいと思う。技を使わずに。

...

W: 試合についてどう思いますか。好きですか。

A: 好きですよ。でも、演式が嫌いです。(W: 少林寺拳法には二つの種類の試合が行われている。「演式」と「運用法」)。運用法は自由な乱捕りなので、楽しいと思います。

W: 優勝したことがありますか。

A: ないですね。でも、楽しい(笑う)。

...

W: 将来は何をしたいですか。子どもか大人を教えることについて考えたことがありますか。

A: そうですね。今もできるかぎり、年少グループで手伝います。多分、いつか子どもを教えるかもしれませんが、大人を教えたくはないですよ。

W: なぜですか。

A: 大人には必ず演式を教えなければならないからです。

...

W: Aさんは少林寺を始めた後、生活が変わったんですか。どういうふうになりましたか。

A: 健康です。始めた後あまり風邪を引いたことはありません。(W: 16年間)

W: 直感、予感、叶う夢のような「不思議な」ことが起こらなかったんですか。

A: 直感? 考えたことがないが。。。でも、最近仕事の時に直感が働くことはあると思います。以前より冷静でいられるようになったため、人間をよく感じています。

...

W: 武道には語彙がありますね。意味について考えていますか。

A: 考えていますよ。でも、少林寺の語彙はそんなに意味が深いわけではないと思う。簡単なことばです。その他に、少林寺の語彙は中国語から来たので、分かりにくいこともあると思います。例えば、仁王拳っていうのは、お寺にある仏像の姿勢ににている。

...

レポートを読んだ後:

A: ナターシャから見れば、大人は試合に参加しないほうがいいでしょう? でも、私も他のメンバーも、先生も参加しています。

W: 私にとって、これは子どものためにとっても大事な例だと思います。やっぱり、先輩、特に先生が参加したほうがいいと思いますよ。ただ、なぜ参加しているか、意識的に理解したほうがいいのではないかと思います。

A: ナターシャは試合に参加したことがありますか。なんで止めた?

W: たくさん参加しました。組み手にも型にも。最初は負けたが、時間に従って毎回勝つようになって、つまらなくなりました。試合に参加している時、緊張しているでしょう?

A: すごく緊張していますね。

W: 私は最初は試合の一ヶ月前から緊張し始めました。でも、慣れてきて、全然平気になったので、つまらなくなりました。その他に、優秀なのに、試合に参加しないけど私より強い人が多いと思ったから。さらに、普通な生活では(学校など)優秀ではなくて、武道も日常生活も合わせたい、同じレベルで両方をしたいと思ったので、結局試合を止めました。

A: でも、道場で使う技と試合で使う技が違います。試合の時、もっと実際に感じられている。

...

対話の結論：

対話の活動は非常に意味深かったと思う。色々考えさせられたので、嬉しい。例えば、「冷静になったため、人間を感じている」というコメントである。この前全く考えたことがない大事なポイントである。やはり、人間が緊張・ストレスなどのせいで他人の本当の気持ちが感じられない。でも、厳しい練習に慣れてきて、普通は緊張する状態で精神的にリラックスができるようになったら、直感的に不安・危険な場所、状態、人間を感じるができる。

もう一つは、やはり、試合の時使われている技は何よりも実際的に感じられている。神経・精神の訓練としても良い手段であるのではないかと考えていた。この理由で試合の時こそ怪我が起こることがよくある。

両方の対話の結果として、最も嬉しいのは、私は一人ではないという考えである。この間様々な道場では様々な先生方のおかげで修行していたが、初めて話以外に実際に実施されている行動を見ている。（現在の道場では実践（稽古・試合など）のみではなく、理論も必ず行われている）。さらに、対話によって、技、稽古の行い方などを新しく見るようになった。

私はこれまで 20 年間武道を行ってきた（スポーツも武術も行ったことがあるけど）。具体的に言えば、空手道、空手術、柔術、合気柔術、居合道、剣術、古武道、少林寺拳法である。その他に、合気道、柔道、Kalaripayat（インドの武道）、ロシアの対術のセミナーにも参加したことがある。先生たちはロシア人、ウクライナ人、日本人、スウェーデン人、フィンランド人、アメリカ人、ベルギー人、インド人であった。今考えていると、私は道場から道場へ行き、様々な人々に会って、やはり、道場の間にある境を無事に乗り越えて、社会、言語、国の間にある境を乗り越えてきた人のような感じがする。勿論、様々な問題にぶつかったことがある。なぜならば、各道場の礼式、ルールが全く違うからである。人間の社会にはよく「出る杭は打たれる」という原則に基づく行動があるが、私もある道場では性の差別（「女性だから武道よりダンス」）のような偏見に会ったことがある。しかし、私もこの道場にいる権利があると考えて、他人の偏見を破ることができたと思う。

しかし、この 20 年間に分かったのは、プロの「スポーツ」、「武道」、「武術」、の間に非常に大事な共通点がある。本当に心を込めて自分に対して厳しい練習をやっている人だけ絶対に他人を軽蔑しないということである。私はこのような気持ちは道場の中のみではなく、人間社会にも存在してほしい。

ことばの市民になる

授業の目的として、「ことばの市民になる」という問題について考えるべきであった。「一体ことばの市民とは何か」という質問が出てきた。以下に私にとって「ことば」と「市民」がどんな意味があるかと別々に説明し、質問に答えてみたいと思う。

普通は「ことば」というのは言語の単位として解釈されている。ただし、私にとって「ことば」そのものは二つの意味を含んでいる。本論では「言葉」と「ことば」と名付けたと思う。

「言葉」とは人がある意味を表す信号である。ここで信号とは、口に出す音、あるいは文字である。つまり、言葉は人が考えること、情緒などを伝達するために使われている信号

である。比喻でいえば、言葉が人と人の間に約束として使われているものであると言っても良いと思う。言葉の形態は言語によって異なるが、含んでいる意味が残っている。言葉の意味はコミュニケーションの手段、祖先の考えを伝達しているものであると思う。

「ことば」は人の認知に直接に関連していて、「言葉」とは異なる意味がある。認知は人の知覚、記憶、推論、問題解決などの知的活動である（デジタル大辞泉）。つまり、人間の考える力であると言っても良いと思う。私は「ことば」とは形態を持たない、人が考えるプロセスの本髄であると思う。一体、人間はどうやって考えるのか？形態がある言葉で？あるいは形態がある像で？もしくは形態がないもので？分かりやすくするために耳が聞こえない人を例として挙げたい。一回も音を聞いたことがない人間に考える力がないわけではない。一体、この力はどうやって生まれるのか。具体的に、認知はどうやって発展しているのか。私はこの説明しにくい考えるプロセスは「ことば」によって実施されていると思う。

言い換えれば、「ことば」は人の暗示的なもの、「内」であるが、「言葉」は明示的なもの、「外」である。私達は毎日、自分の内に行われている「ことばの流れ」（考えるプロセス）を中止して、相手が分かりやすくするためにこの「ことば」を「言葉」で説明する。つまり、自由意志によって暗示的なものを明示的なものにする。

ただし、私は形態がある「言葉」は必ずしも内的な「ことば」を完璧に伝達できるとは思わない。なぜならば、「ことば」そのものは「言葉」と違って、枠組みがなく、絶えず変化する考えるプロセスのものであるからである。逆に、「言葉」は時点的なものであり、具体的な枠組みがある意味を含んでいるものである。幸いに、「ことば」の特徴は視線、表情、ジェスチャー、ポーズ、行動など、つまり、黙っているところに表れるものである。このような「ことば」の暗黙表現は相手に暗黙的に知覚されるので、暗黙的なコミュニケーションも非常に深い意味があるに違いない。

市民とはある場所（市、都市など）、あるいは人間社会に属して、社会を構成して、社会の生活に主体的に参加している者であると思う。

私達も人間社会に属している市民であり、この社会では生活を上手く送るため、他の人とコミュニケーションを行わなければならない。ただし、生活を送るのに、考える力も考えることを伝達する力、つまり「ことば」と「言葉」、も必要である。だから、私達は言葉の世界に住んでいる人間であり、「ことばの市民になる」というよりは「ことばの市民である」と言ったほうが良いのではないかと思う。

結論

私にとって、「ことばの流れ」は「自由」そのものと密接な関係がある。逆に、枠組みがある「言葉」は「不自由」の意味がある。考えることは夢のように、ある程度意味を伝達できるが、完璧にはできないと思う。なぜならば、各人は各言葉に対して自分のイメージを持っているからである。例えば、「素晴らしい」といったら、相手にとって「素晴らしい」という言葉は私と同じ意味を含んでいるわけではない。感覚能力も、知覚能力も、想像能力も違うかもしれないからである。「美味しい」といったら、相手にとっても美味しいかもしれないが、ニュアンスが必ず違うのではないか。さらに、相手によって「言葉」の使い方、量、質などをそれぞれ処理することは当然であるが、「ことばの流れ」をだれもコントロールできない。だから、「自由」と「不自由」が「ことば」の概念にも含まれている。

こういうふうに考えていると、私の興味・関心である武道の語彙は「言葉」であるため、この語彙が含んでいる意味を理解する人の考え（「ことばの流れ」）を制限していると理解

できる。例えば、「谷落とし」という語彙を聞くと、すぐ具体的な、決まっているイメージが生まれる。言葉の意味が分からない人にとってこの技は「土地打ち落とし」（もっと厳しいのではないか?）、あるいは「海落とし放免」（もっと優しい?）というイメージがあるかもしれない。昔、生け花が創造された際、創造者は名前を付けなかった。なぜかという、観客は作品を見ながら、自分の想像力に従って意味を解釈するからである。（考えれば、なぜ抽象的な作品（絵画、音楽など）は名前があるのか?）

つまり、技の名前が分からない人は意味をもっと自由に解釈できる。技で、言葉の使い方のように、相手を殺すこともできるし、生かすこともできる。つまり、「言葉」の枠組みによって制限されない人は生活中に育成された価値観に従って意味を解釈して、技の使い方を決める。だから、危ないと思う。そのため、武道は武術あるいはスポーツに変わることがよくある。やはり、一般的な教育と同じように、武道の教育（語彙、技など）によって人間の価値観を形成し、人間を育成できるに違いない。

私は現在世界で行われている「武道」の教育に対して非常に大きな不安を持っている。「武術」あるいは「スポーツ」を「武道」と名付ける先生が多い。なぜならば、ほとんどの人はこの三つの現象を区別しないからである。なぜ区別しないかという、この分野は研究がまったく行われていないからである。研究が行われていないので、「間違った」武道が教えられる。大人に対してもあまりよくないことだと思うが、子どもに対して行われている場合、危険であるに違いない。勿論、すべての結果は教え方に左右されるが、「武道」の代わりに、野心、貪欲、残酷さなどを生む間違った形の「スポーツ」と「武術」を修行している人にはどんな人格が育成されるかと考えると、やはり、違和感を感じている。

名前はそんなに大きな意味がないかもしれない。最も大事なのは行う活動にはどんな意味を入れるということであるが、やはり、非専門家（子どもを道場につれてきた両親など）が分かりやすくために区別したほうが良いと思う。

私は武道での生活と日常生活、武道教育と言語教育、両方にある人間関係を比較して、絶えず非常に興味深い結論を出している。共通点は多いというよりはやはり、概念が同じであると言ったほうが良い（つまり、目的、授業・稽古の構造、アプローチなど）。武道と言語の教育を合わせたら、人間の認識の発達には面白い結果になると思う。ただし、「スポーツ」「武術」「武道」の違いを考慮して、この三つの間にある枠組みを意識することが不可欠である。人間、特に子どもに対して武道と日本語の教育を行うのは、考える力、認識の発達、従って、人格の形成を目指しているとても深い意味がある教育になると思う。

この授業は様々な考えのために非常に重要なきっかけになったので、参加できて、本当に嬉しい。これからも色々考えていきたいと私は思う。